



Title	駅通制度と新聞成立の関連について
Author(s)	江口, 豊
Citation	メディア・コミュニケーション研究, 68, 57-77
Issue Date	2015-03-20
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/58522
Type	departmental bulletin paper
File Information	03_Eguchi.pdf



駅逓制度と新聞成立の関連について

江 口 豊

Viele Wege, auch Umwege und Irrwege, sind gegangen worden, und lange hat es gedauert, ehe man am Ziel war. (回り道も迷い道も、数多の道を歩み、そして目的地にたどり着くまでには長い時を要した。) Elger Blühm¹

0 序

ヨーロッパでの新聞成立に関連し、江口(2014b)では、発行する主体、とりわけ印刷業者の経済的動機に関わる研究についてその一端を紹介した。メディアとしての新聞による公共コミュニケーションプロセスが成立するための条件を検討すれば、おそらく以下のような諸要素を考慮する必要がある²。

発信者：供給の動機、経済的資源、ニュースの入手確保、編集を含む制作能力、販売媒体とその環境：政治制度的側面、情報流通のための基盤

受信者：需要の動機、読書能力を中心とした理解能力、購入するための経済的能力
このなかで、情報が流通し、新聞発行者がニュースを入手する前提として、一定程度の交通・通信制度の整備が求められる。ヨーロッパ、とりわけドイツ語圏でのそれを保障したのが、神聖ローマ帝国におけるさまざまな情報通信制度であろう。とくに、国家に公認された Thurn und Taxis Post（以下タクシス駅逓もしくは帝国駅逓）と新たな公共メディアとしての新聞の成立との関係を中心に論じたのが、Behringer(2003)である。同書は Behringer にとってのボン大学に提出された教授資格請求論文となっているが、新聞に代表される近代のメディア成立という情報革命の大前提こそが駅逓制度やそれに付随する交通網の整備であると指摘している。

本稿では、同書の内容を中心に紹介しながら、16世紀末から初期の週刊新聞が登場する17世

1 17世紀ドイツ新聞成立史研究者 Blühm (1971, 64) の論攷から。

2 本研究は科学研究費補助金(挑戦的萌芽研究、課題番号26570001、「ドイツ語圏等における新聞制度成立の背景に関する研究」)の助成を受けてまとめられた研究成果の一部である。

紀前半までを中心に、神聖ローマ帝国領域における情報流通の基盤整備について紹介したい。なぜなら、1605年と推定される新聞成立（現存する新聞は1609年のものが最古）のためには、こうした基盤整備が不可欠だと主張する Behringer (2003, 2010) の次の指摘は一定の説得力をもつと考えるからである。

17世紀初頭の新聞の発明に関しては、グーテンベルク以降の《印刷革命》がかくも影響力の強いものであったのなら、なぜ15世紀に即時的なニュースの印刷が始まらなかったのかという問いこそが当を得たものである。…〈中略〉…この仮説が謂わんとしているのは、時間と空間の新たな組織化が近世初期の一連のメディア革命全体に必要な前提をなしていたということである³。

1. 制度としての Post⁴ の多面性

ドイツ語圏、例えばスイスの地方などでも、鉄道からの接続交通網としてやはりバスが運行されているのをよく見かける。Postbus という名前の黄色いバスの車体には郵便のシンボルであるホルンがあしらわれている。直訳すれば郵便バスということになるが、そもそもは郵便馬車 (Postkutsche) として発足したものが機械化され、創設時とは比較にならないほど高速で密度の濃い交通網となって現在に至っている。なぜ名前に Post (郵便) が付いているのか、この間の事情を承知していなければ理解できないであろう。それどころか、15世紀末に神聖ローマ帝国で公式に制度化された帝国郵便すなわち帝国駅通と新聞の成立とを結びつける Behringer の指摘にもわかには理解しがたい。

17世紀初頭ではすべての面で直接の関連を見いだしにくい、制度としての Post には多彩な側面がある。(1)書簡や小包などの運搬システム、(2)ニュースにあたる情報伝播のシステム、(3)人の運搬システムの三つである。また、(1)の書簡等の運搬システムも、現在の郵便制度から連想される戸別配達システムなどは確立されておらず、それははるかに後世のことである。本稿のテーマである新聞成立との関連で最も重要なのは、(2)の情報伝播システムとしての Post ということになる。Ordinari Zeitungen という表現で定期的に入信するニュースを表すが、字面通りの意義はさておき、Zeitung は当時としては「報告、知らせ」であり、現在の意味の紙媒体の「新聞」ではない。16世紀に地図表記の改善と相俟って、駅通路線が文字通り旅行ガイド

3 Behringer (2010, 39).

4 渋谷 (2001, 51) は、Post の訳語としてあえて「郵便」ではなく「駅通」をあてており、本稿でもそれに倣うこととする。Behringer で多用される用語のうち、制度としての Bote には早馬も含めて「飛脚」を当て、17世紀前半もしくは後半に路線網を拡充させた Reichspost と Landespost にも「駅通」を適用し、「帝国駅通」、「領邦駅通」とする。

となり、18世紀以降になると Postkutsche、Postwagen に基づく旅客業が本格化して、観光業の萌芽となっていく点なども Behringer は取り上げているが、「郵便」という日本語にはけっして求められない意味の領域である。

1.1. 神聖ローマ帝国の駅通の前身としての飛脚、継ぎ馬、伝令など

古今東西の情報伝達システムについてはすでに多数の著述がある⁵。タクシス家が運営していた駅通・郵便の実態と結びつけやすいと考えられる古代ローマ帝国を初めとする古代帝国での馬を利用した伝令制度がこの種の記述で触れられことも多く、Behringer もそれらを踏襲して紹介している。タクシス家が運営した駅通制度の管轄権を巡る議論では、古代ローマ帝国での *cursus publicus* という継ぎ馬制度が一つの根拠として持ち出されることもあった。しかし、神聖ローマ帝国の駅通との直近で直接的な関連が想定できるという意味で、Behringer (2003, 53) は1380年代ミラノ侯爵領の継ぎ馬制度 (Reiterstafetten) を挙げている。当時のミラノは「初期の銀行と織物・武器交易で……〈中略〉……コンスタンティノーブルとパリを除けば、……〈中略〉……125,000人の人口を擁し、ヨーロッパでも他に類を見ないほど富を蓄えていた」。また14世紀のイタリアは文字通りマキャベリの時代であり、Behringer (同上) は「ミラノが支配的なパワーに発展しつつも、ミラノ侯爵はライバルたちからの要求に対してその支配権を守らねばならなかったし、そのことは十分機能する 早期警戒システム⁶ への関心を当然だと思わせる」と指摘している。ミラノの制度の特徴の一つに、「コミュニケーション制度が段階を追って厳密な時間表示の下に効率性を管理できたヨーロッパ史上初の時間記入票 (Stundenzettel)」の存在が挙げられる。このために継ぎ馬の乗り手には「身体的な優秀さの他にも読み書き能力と機械式時計の抽象的時間の知識」が求められ、「書状や運搬物受領の時間を署名とともに記録」したのである (Behringer 2003, 53f.)。駅通で馬の交替を行えるようにすれば、その維持費用がかさむことから、ミラノでも15世紀になって以降に馬飛脚のリレーが常態化したと考えられている。いずれにしても、ミラノの継ぎ馬飛脚が「組織レベルのパターンを開発し、16世紀に北イタリアの駅通主宰者によってヨーロッパ全体に広められることになる」と Behringer (2003, 54) は結論づけている。

「一般的に14、15世紀に飛脚制度 (Bote) が最盛期を迎えたことはコミュニケーション機能への需要が甚だしく増大したことを示唆」しており、実際当時は「国王、修道院や教団、都市、大学、商人が飛脚」を抱えていたのである。なゼルネッサンス期のイタリアで駅通制度や飛脚が発生したのかについて、先に触れたミラノの特殊事情もさることながら、次の二点が挙げられている。一点目として、地中海貿易で栄えた「ベネツィアで1305年の時点で40人の飛脚が

5 古代国家の情報伝達に関しては Innis (1950) *Empire and communication* 参照。

6 下線部は本稿で付加したもので、原著ではイタリックで表記されている。

Compagnia dei Corrieri という名の組織でまとめられていた」(Behringer 2003, 56) 記録にもあるように、「迅速で信頼のおける情報への需要が商人たちの間で強かった」⁷ ことがある。二点目に、人文主義者たちが読書の対象としてヘロドトス（古代ペルシャの継ぎ馬を記述）や古代ローマ帝国の歴史（アウグストゥス皇帝治世に *cursus publicus* という駅逓制度を導入）を好んで読んだことも挙げているが、これは推測というべきであろう（1380年代のミラノ侯爵がそうした読書傾向を示したことが記録されているようである）。ミラノで始まった継ぎ馬制度は、1444年にはナポリ王国で、1476年にはフランスではっきり *postes* 制度として、ほぼ同時期に教皇シクストゥス 6 世、1480年代初期にイギリスのエドワード 4 世と導入が続き、マクシミリアン 1 世が神聖ローマ帝国に従来の飛脚ではなく駅逓を設けることに繋がっていく（Behringer 2003, 58）。マクシミリアン 1 世は、14世紀末のチロルの獲得、ブルゴーニュ侯国領主の娘マリールとの結婚による領地拡大と、ボヘミアやオーストリアは勿論、チロル、フランドル、ブルゴーニュと遠隔地どうしを結ぶ連絡通信網を切実に必要としていたのが最大の動機であろう。

なぜこうした短期間に駅逓制度が拡大普及したのか、その理由について、Behringer (2003, 63f.) は以下の点を指摘している。つまり、先に触れた騎手の識字能力、時計による時間認識などの些細な点を含め特別なテクノロジーは不要であること、騎手の宿舎と食事、馬、厩舎、厩務員などの人材、維持管理の費用（これが大きな問題となるのはスペイン王家が支払い不能に陥った事態の影響が示している）、これらを組織するノウハウがあれば、ある意味で誰でも運営できると考えられそうなものである。ただし、複数の国家・言語使用域にまたがって活動することもあり、言語や方言の知識、交渉能力（都市や地域の統治者、権力者ばかりでなく駅逓の宿駅所長を兼務してくれる宿屋の経営者なども相手にする）が必要となり、その点でイタリア、スペイン、教皇庁と経験を積んでいたタクシス家にはやはり一日の長があったと考えるべきだろう。これに対して、駅逓制度を受け入れる側、発足当初の利用者にとっては、交替での騎乗により、休憩や睡眠による時間的損失が無いということ、すなわち迅速さが追求されたシステムである点が大きな魅力だった。さらに制度自体が安定してくることで信頼性という利点もこれに加わる。

因みに「Post 郵便、駅逓」という概念について、イタリア語の動詞 *ponere* の派生形 *posta* が移入されて使用された」と考えられているが、Behringer は「飛脚制度との最大の相違が組織形態にある」として、「たいていは配達人が馬を交替させる宿屋と関連させた宿駅を確定することによって空間の区分を示す」と述べている（Behringer 2003, 56f.）。またドイツ語圏の文書で最初に Post という語が現れるのがインスブルック宮廷財務室の記録で、そこには *Johanneto Daxen Obristen postmaister* という肩書き付きの人名とともに *zu notturft der post*（ポストへの火急の支出のため）という記述で現れる。因みにこのときの支払いは300グルデンとなって

7 人文主義者兼政治家 Mario Sanudo の日記の記述から（Behringer 2003, 59）。

いる (Behringer 2003, 59)。

1.2. タクシス家について

本稿の内容上ある意味で主要人物でもあるので、すでに多くの記述があるものの⁸、この家系自体についても Behringer (2003, 59f.) の記述に沿ってごく簡単に紹介しておきたい。触れておくべき点としては、イタリア語では Tassis と名乗っていた人々がベルガモで飛脚業務を生業にしていたこと、そこからベネツィアでの飛脚業務に進出し、ベルガモの飛脚業者 (Taxis 家以外にも Ronzoni, Zupponi, Panchino, Bosi, Calepio などの多くの家名が挙げられている) の中でもリーダー的存在だったこと、1474年から1539年にかけて、ベネツィアでの実績から教皇の飛脚業務を務めることになったこと (ヴァチカン文書庫調査で出納記録に Joanettus da Pergamo「ベルガモ出身のヤネット」という男の名が登場するが、これは Janetto Tassis を指すと推定される)、教皇庁から最終的に1480年に神聖ローマ皇帝フリードリヒ 3 世に紹介されたことなどである。こうして神聖ローマ皇帝への接近の手がかりを掴んだ後、上に述べた神聖ローマ帝国の版図拡張を見据えて、遠距離をカバーする迅速で効率的な連絡網の必要性を感じていたマクシミリアン 1 世 (1490年当時は厳密には Römisch-deutscher König であって皇帝 Kaiser ではない点が神聖ローマ帝国の複雑性、特殊性である) との縁を見いだす。その後1808年に国営化されるまでの長きに亘って郵便事業を担い、莫大な土地所有者となるとともに、様々な事業への投資などにより経済的には栄華を極めていく。現在でも、レーゲンスブルクには宝物庫と厩舎からなる博物館の他に、ザンクトエメラムの城と回廊を観光客に見学用として開放している。タクシス家はハプスブルク王朝によって世襲制の封臣 (Erblehen) として遇せられた結果、侯爵家としてドイツではゴシップ誌にその風聞が取り上げられる貴族の代表のような存在となっている。

1.3. 神聖ローマ帝国とタクシス家との関係および駅通の変遷と特質

上に紹介した Behringer (2003) の記述が示す通り、1490年にはタクシス家にインスブルックの宮廷から支払いがあり、駅通業務が開始されたと考えられるが⁹、Janetto 自身はその後「ベネツィアへの肩入れが禍して、皇帝関連業務から閉め出され」¹⁰ るものの、フランツ・フォン・タクシスが1501年にブリュッセルのフィリップ美王により駅通局総裁へ任命されることに繋がる。この一事をもってしても、駅通業務を通じたタクシス家と神聖ローマ帝国との関係が300年

8 Behringer (1990) Thurn und Taxis. Die Geschichte ihrer Post und ihrer Unternehmen. の和訳が出版されているが、残念ながら内容を確認する機会を得ていない。

9 マクシミリアン 1 世が帝国都市シュパイアーに宛てて宿駅の設定を求めたことへの返書が無いことに触れた1490年 7 月14日付けの書簡もある (Behringer 2003, 60)。

10 Behringer (2003, 59) 注記43参照。

間順調に推移したわけではないことが分かるし、さまざまな理由から¹¹ 契約が新たに交わされたり、ハプスブルク家側からの支払いが滞ることが起きたり、果ては競合する人物に駅通運営が委ねられそうになったりと問題も数多く生じ、駅通制度もまた変化していく。

変遷する駅通制度に関連して Behringer (2003, 65) は、近代的な郵便制度の六つの要件について、経済学者 Sombart¹² を引用して「理念型としての抽象化」を紹介している¹³。(1)一般利用への拡大、(2)規則的な道程の設置（出発と到着の地理的確定とその維持、それらの時間上の公表）、(3)相互乗り入れする飛脚路線網の設置、(4)路線の拡大、時空間レベルでの郵便接続の密度増加、(5)集配手続きの完成、(6)利用の定料金化の六点である。勿論新聞成立期を問題にする上で、対象となりうるのは16世紀から17世紀前半であるから、タクシス駅通がすべての要件を満たせたわけではないが、例えば1505年のフランツ・フォン・タクシスとフィリップ美王との第一回駅通契約では、私信の運搬禁止は謳われておらず、一般外部の利用がフッガー家のような財政的負担を負った者には認められていたことが分かっている。フランスでは16世紀中は駅通の私的利用は死罪の対象だった (Behringer 2003, 65) のであり、Sombart の第一の要件を満たすことになろう。Behringer (2003, 70) に引用された Ohmann の研究では、1512年の段階の比較ですでに、タクシス駅通は他の飛脚制度よりも早いばかりでなく安価であったことに触れている。そしてこの頃から民間利用も増加するが、その利用者には当時不定期で刊行された新聞の一形態 Neue Zeitungen で情報源として頼られていたアウクスブルクの都市書記の名も確認されている。

この第一次駅通契約では、ハプスブルク側は年に12,000リーブルをスペイン王家の財務部門が支払い、タクシス側には義務として、「一駅ごとに良馬一頭を備え、よく整えられた駅舎」を構えること、ブリュッセルからインスブルック、パリ、プロア、リヨン、グラナダ、トレドへは固定した運搬時間が決められた (Behringer 2003, 67)。この時点では駅と駅との間隔は4ドイツマイル、つまり約30キロメートルと取り決められていた。当時のルートでは、現在のベルギーの都市メヘレンからインスブルックまで20駅を経て、5日半ほどで到着し、そこからさらにウィーン郊外の宮廷まで伸びていた。

駅通契約というものの本質として、ハプスブルク側は迅速で信頼性のある情報伝達システムを求めたのみで、運営の内実に関してはいわばタクシス側の裁量に任されたといえる。現代でいうところのアウトソーシングといっても過言ではないだろう。駅通所長 (Posthalter) は、た

11 例えば1534年の契約締結について Behringer (2003, 79) はアントワープでの取引市場の開設や公会議開催の準備なども挙げている。

12 Sombart, W. (1916/1927) Der moderne Kapitalismus. Historisch-systematische Darstellung des gesamteuropäischen Wirtschaftslebens von seinen Anfängen bis zur Gegenwart. 3 Bde. München/Leipzig.

13 日本語にするにあたり表現を一部変更してある。

いてい宿屋の主人で「客の宿泊の経験があり、所帯に賄い婦や下男を抱え、経営上の目的で馬や馬車も」もっていたが、「彼らは駅通局長から保証金を受領し、その金で駅通の継ぎ馬の費用をカバーできた」し、「駅通ルートを利用する旅行者への馬の貸し出し」や「宿泊と食事などのサービスで利益」を得るというシステムである。これはいわば「フランチャイズシステム」とも言えるが、「市場開拓を僅かな資本投下で可能にした」（Behringer 2003, 72）。

1516年にカール1世とフランツ・フォン・タクシスおよびその甥のヨハン・バプティスタ・フォン・タクシスとの間で締結された第二次駅通契約以降、宿駅間の間隔の距離が短縮していき、1628年の記録では、1490年の駅通設立当時の5ドイツマイル（約37.5キロメートル）からほぼ2ドイツマイル（約15キロメートル）に短縮されていく（Behringer 2003, 92）¹⁴。これは乗り手と馬の疲労・損耗を考慮した場合の「理想的」¹⁵な距離といわれている。また、第一次駅通契約では「一駅に一頭」だった馬の数が「二頭」に増えているのは、宿駅間の距離短縮とともに、スピードアップを保証するための措置とも考えられる¹⁶。

1534年には駅通の定期化が始まる（週に一便が原則）。これが16世紀の社会（とりわけ上層部の人々）の一週間の時間のリズムを変革したと Behringer は結論づける。各駅により駅通騎手の通過曜日が異なるものの、それは Posttag（ポストの日）と呼ばれ、日曜日の礼拝という全国一律のリズムとは違う点で時間・生活リズムに影響したという指摘である（Behringer 2003, 105）。

20年ほどにも及んだ駅通改革を経て、1597年にはルドルフ2世により正式に「帝国駅通（Reichspost）」として再出発、定着し、駅通所長への未払い問題などの解決を通じて再び運営を担ったのはタクシス家となった。これ以降はプロテスタント領域への拡大も進め、各地の領邦駅通、都市飛脚などの通信制度を排除するだけでなく、一部では協働、共存も図っていくことになる。とくに1615年以降は帝国駅通の拡大とルート網の細密化が進んでいく。

1.4. タクシス駅通を巡る諸問題

当初、順調に見えたタクシス駅通も、オランダ独立戦争勃発後、1577年のブリュッセル占拠やスペイン財政の破綻によりスペイン領ネーデルラント駅通としては破綻してから、1597年に文字通りの帝国駅通（Reichspost）の確立に至るまでの期間、上にも触れた駅通改革を経験することとなる。ハプスブルク家にとっての改革目標となったのは、「帝国駅通委員会の求める

14 Behringer (2003) は駅通ルートの確定とヨーロッパ規模の拡大・連携接続による旅行への影響も詳述しているが、本稿の目的とは直接関係しないので、この点については別の機会に譲りたい。ただし、Post が通信や小包などの運送に限定されず、人の移動にも関与し、それが旅行ガイドの成立、メルカトルなどの地理学者による新たな地図の作成にも関連したことは注目すべきであろう。

15 Behringer (2010, 40) 参照。

16 Dallmeyer (1977, 4f.) 参照。

……カトリック王朝ハプスブルク家の管理下にとどまり、コストの点で不偏で、十分に機能するコミュニケーションシステムであり続ける」という点である (Behringer 2003, 136)。しかし、ここで問題を錯綜させていく要因には多種多様なものが見られる。大まかに整理を試みると、(1)時の国際政治情勢、(2)国内統治に関わる国家体制の特性、(3)郵便の財政、(4)タクシス家の活動範囲と位置づけ、に整理できるかもしれない。それぞれが絡み合っていることは当然である。(1)としては、ハプスブルク家が結婚政策による版図の拡大をしたこと (ドイツ、オーストリアを中心とした神聖ローマ帝国にブルゴーニュ侯国を加え、一時はカルロス 5 世によりスペイン王さえ兼ね、その退位後再度分裂し、オーストリア・ハプスブルク家はほぼドイツ語圏に縮減という目まぐるしい変遷)、(2)としては、神聖ローマ帝国が名目上選挙により王や皇帝を選出し、選帝侯を始めとして諸侯に様々な行政上の権限を分け与えていた体制を持っていたこと、郵便との関連では、マクシミリアン 1 世の弟フェルディナント 1 世が1521年にオーストリア本国地域を継承してオーストリア宮廷郵便を1521年に帝国郵便とは別に設立したことが挙げられる。この事実が有力な根拠にされ、郵便制度の運営・管轄権が皇帝側の意図に反して¹⁷ 明確ではなかった。これに宗教改革から始まりアウクスブルクの和議を経て、17世紀前半の三十年戦争に顕現した宗派対立の問題なども絡んだ。(3)としては、財政負担を避けるためにタクシス郵便の資金援助者が最初からスペイン領ネーデルラントのフィリップ王(マクシミリアン 1 世の息子)だったことから始まり、スペイン王家の財政破綻も当然影響した。(4)としては、タクシス家が1615年まではあくまで郵便業務を請け負う民間業者であること、スペイン王家とも郵便契約を結び、イタリアでの活動 (ベネツィア、ローマ、ナポリなど) を路線に含めたことがある。また、郵便としての評価は別にして、帝国内でのタクシス家の評価もさまざまあり、政治的実権を巡る相克も常にあったために、運営責任者の地位を巡って競合が生じる場面もあった。

帝国郵便自体が半ば国際的な諸地域を貫く通信等の基幹線として考えられ、帝国領内では皇帝の命令直下路線が確定されたとの予想を抱きやすいが、現実とはまったく異なる。例えば帝国都市としてすぐに宿駅の設置を受け入れた所はなく、1520年になってようやくアウクスブルクが路線に接続したに過ぎない (Behringer 2003, 97)。帝国都市の特別な地位や特権と郵便 (その従業員の処遇なども含め) の特殊な位置づけ (納税、徴兵などの義務無し、裁判権もブリュッセルの郵便局総裁にあったこと) との衝突を恐れた都市側が接続を拒否したのである。さらにはハプスブルク帝国自体の拡大・変遷を経て、ブリュッセルを本拠とする「スペイン領ネーデルラント郵便」の通過によるスペインという外国からの影響への危機感も理由となった。その結果、大都市近在の小村が郵便局や宿駅の所在地になることが頻発する。顕著な例がシュパイヤー (帝国都市) 近郊のラインハウゼン (もっとも重要な中継地の一つ) である。現在ではよ

17 歴史学で論じられる「郵便レガリーア (Postregal)」の問題については、山本 (2007)、Behringer (2003, 216 以降) を参照。

ほどの大きなドイツ地図で見なければ掲載されていないほどの小さな町であるが、当時はストラスブルへの駅通・都市飛脚の分岐点として重要視される場所である。1546年に駅通の通過を拒否したエスリングンという帝国都市も、最終的に駅通の通過を容認したのは1745年のことという極端なケースもある（Behringer 2003, 98.）。逆に自領地を駅通の路線が通過することと引き替えに、領主の等族が駅通の利用権を要求するケースも少なくなく、これはこれで駅通の経営を圧迫する一因ともなった。

いずれにしても、中世から存在していた都市飛脚、修道院や教団の飛脚・伝令、大学が運営する飛脚、商人飛脚、俗に言う「肉屋郵便（Metzgerpost）」など、さまざまな形態・運営主体の通信制度が近世においても存在もしくは発生し、そのときどきの全体像を把握するのは容易ではない。帝国駅通以外の飛脚制度禁止が繰り返し発令された事実は逆の現実を浮かび上がらせるものである。

最も重要な問題として、駅通制度の運営・管轄権ともいうべき「郵便レガリーア」に触れざるを得ない。上に述べた通り、タクシス駅通自体が複雑な背景をもって成立し、展開されていった。これを維持するには莫大な財政出動が必要であること、しかし非常に有用な制度であることを帝国駅通に反対する勢力も認識していた。オーストリアには宮廷駅通が認められていたことなどを根拠に¹⁸、宗教改革や三十年戦争を挟んだ宗教的対立などが加味され、17世紀半ば以降ではあるが、ブランデンブルク選帝侯、ザクセン選帝侯などのプロテスタント諸侯が独自の駅通制度を発足、拡充させていく。ただし、17世紀末以降、駅通事業の本質的利益という共通点（通信網の拡大延長、拡充細密化）に導かれて、帝国駅通との協働に舵を切っていくことになる。

2. 帝国駅通の路線はなぜフランドルとイタリアとを結んだのか？

そもそも1490年に最初の皇帝の援助による駅通がブリュッセルとインスブルック、さらにはタクシス家のいわば縁故もあってベネツィアにまで接続された根拠は何であったろうか。タクシス駅通はもちろんハプスブルク帝国内にとどまらない。先にスペイン本国、イタリア（ローマのみならずナポリでも）で敷設され、中継地としてのフランスも含め、一時的にはスペイン領ネーデルラントを一部とするブルゴーニュ侯国をも飲み込んだ神聖ローマ帝国という一大版図を活動の場としていた。古代帝国のように面積が大きければ臨時の継ぎ馬伝令システムだけでも統治するためには十分かもしれない。こうした点について、North (2000) が説明を与えている。まず15世紀以降から16世紀は大航海時代であり、「ヨーロッパの経済史がヨーロッパ自身

18 山本 (2007) は、皇帝側の軟弱な姿勢の根拠として、国王選挙や対フランスおよび対トルコ政策などを挙げている。

の海外膨張によって規定され、……スペイン人、ポルトガル人、後にはオランダ人、イギリス人、フランス人によって地球の大部分が植民地化、ヨーロッパ化された。……同時にヨーロッパ経済の重点が徐々に地中海から大西洋に移った」(North 2000, 1.)。新大陸やアジア、アフリカから膨大な量の金と銀、香辛料などの貿易品がヨーロッパに流入した。そういう状況下で「ポルトガルの香辛料貿易でも大陸間貿易でも利益を得ていたアントワープ」が「新たな交易上の中心」(North 同上)となったのである。地中海貿易の中心であったベネツィアは、16、17世紀以降でもスペインとの情報通信拠点として重要性を維持していた¹⁹。ハプスブルク家が婚姻政策でスペイン本国とその植民地をも併せ持つことで、こうした海外との経済的な結びつきは到底無視できるものではなかったであろうし、特に16世紀前半に世界帝国となったハプスブルク家にとって政治的な次元での重要性をもっていたことはいうまでもない。海外との交易がもつ一面として、「ポルトガルの香辛料商船がインドまでの往路に4ヶ月半から7ヶ月要し、ゴアからリスボンまでの復路にも再度4ヶ月半から9ヶ月要した」ことで分かるように、「投資された資本の償却期間が長期化し」、「商人からの貸し金需要を増大させ」たのである(North 同上)。南ドイツの商人やチロルで銀山経営を進めていたハプスブルク家にとっても、金、銀を運搬する商船が難破したり、海賊に襲われたりしたというニュースは、無事に新大陸から銀を運搬する船が到着したというニュース同様、直接大きな影響を被る情報であった。そうした「アウクスブルクのヴェルザー家のようにポルトガルの香辛料船の航海自体にも投資を行う」他、「ヴェネズエラの商社支店にパートナーとして参画する」など、さまざまに関与があったからである。交易の重点が大西洋に移るなかで、新大陸のみならずイギリスやオランダとも繋がるアントワープがますます脚光を浴びていた。Pieper (2001) が指摘するように、情報集積と分配の担当地域を相補的に分担していた両都市とその背景となったフランドルとイタリアとを結びつける通信網が非常に重要であったことが理解できるのである。

3. ストラスブールにおける新聞成立とその前段階に関する Behringer の見解

さて、こうした帝国駆通の整備が17世紀初めの定期的印刷媒体の週刊新聞(ストラスブールではおそらく1605年に、ヴォルフエンビュッテルでは1609年)成立とどう関係するのであろうか。Behringer (2003, 308) は、定期性が見られない *Neue Zeitungen* (特別な事件・出来事の際に随時販売された号外のような印刷活字媒体) が16世紀末に飛躍的に増大した点にまず注目し、それがこれまで論じてきた駆通制度と都市飛脚などの情報網整備に関係すると指摘する。江口(2014a)でも新聞の前身形態として挙げたものを順に検討してみると、まず印刷されない形態としての手紙や手紙に添えられた「ニュース」としての *Zeitungen*、そしてそれを専門の書

19 Pieper, R. (2001) 参照。

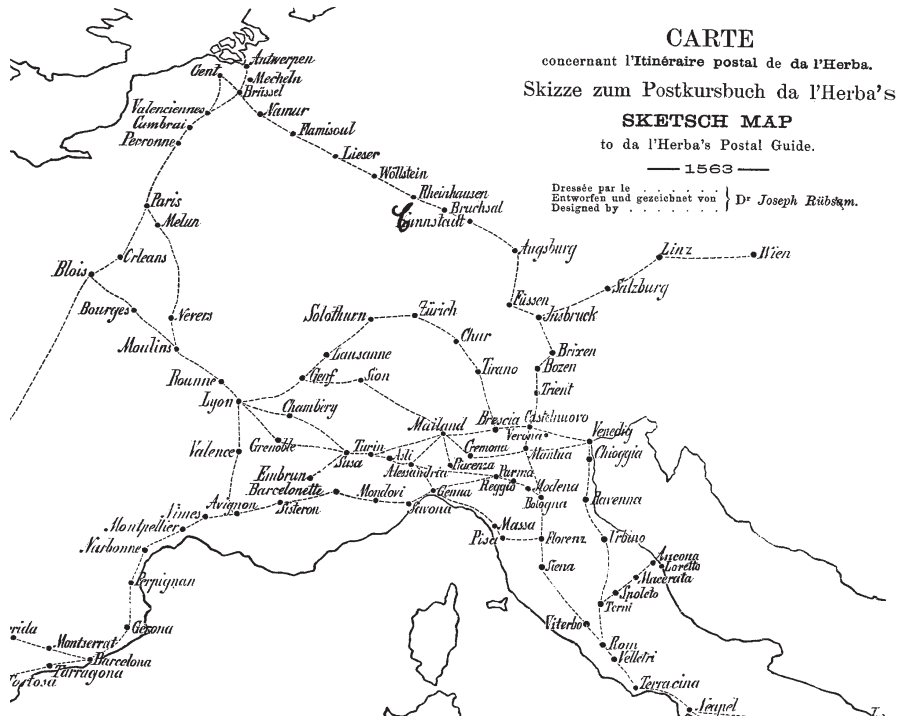


図1 イタリアを中心に版を重ねた旅行ガイドの先駆け Itinerario delle poste per diverse parte del mondo (1563年 Giovanni da l'Elba 著) 掲載の駅通路線図 (一部を拡大)²⁰

き手である Zeitungsschreiber (Novellanten という言い方もある) が定期的に駅通に載せて伝播させた Ordinari-Zeitung (手書きのもの) も駅通制度の副産物と言うべきであろう。さらに Behringer (2003, 306) は、Lang に依拠し、印刷物としての Neue Zeitungen (チラシもしくは臨時新聞) も駅通システムに基盤を置いていたという根拠に、「情報が駅通局の書記から対価を受け取った上で Neue Zeitungen の書き手に与えられていた」ことを挙げている。

Behringer (2003, 309) は、「1560年代なかばに主要駅通路線の完備とほぼ時を同じくして、印刷者もしくは編集者が関連するテーマのシリーズの一部として通し番号を付してはいるものの、定期性を欠いた Serienzeitungen (シリーズ新聞)」²¹ にも注意を向けているが、それ以上に重要視しているのが Meßerelation (見本市通信) で、「独自のテキスト種を示すとともに、販売経路も Neue Zeitungen (チラシもしくは臨時新聞) とは異なり、とりわけ内容と外見上の特

20 <http://de.wikipedia.org/wiki/W%C3%B6llstein> より2014年11月1日採録。

21 Behringer はこの印刷物について「Neue Zeitungen のようにセンセーショナルな大見出しを避け、継続的に選りすぐった真面目な対象で公共的な関心に関わるもの」という説明をあたえつつも、いまだ体系的に調査されていないとしている。ただし、Dresler を引用して、これが同時代の命名ではなく、分析上の概念だという点も紹介している。

徴（絵の無い文章、上品な文体、即時性、定期性）」に注目している。

とくに、Stieve という19世紀末の研究者の成果を紹介して、編著者とも言うべき人物について次のような事情を明らかにしている。Meßrelation の発案者である Michael Aitzinger von Aitzing はハプスブルク家の宮廷侍従長であった地方貴族の14人の子の一人として生まれ、ウィーンとルーヴアンの両大学で学び、古典語であるラテン語、ギリシャ語、ヘブライ語を始め、スペイン語、フランス語、オランダ語にも長け、自家の所有地の管理もあって長期間オランダに滞在した経験を持っていた。彼には「歴史的事象への偏愛があり」、1584年にフランドル滞在後にケルンに移住している。1581年に Leo Belgicus というラテン語版のニュース集のような書籍を編集、販売した。好評だったため、ほぼ一年おきに版を重ねたものであるが、その文体と叙述法を後に Meßrelation に転用したらしい。「Aitzinger も自身を直近の過去の歴史家、いわば現代史家と了解していた」のである。こうして1583年に最初の *Historica Relatio* を「過去一年間の最重要事」を集めたものとして編集して出版、1588年以降は人気を博したために刊行を半年間隔とした。記述の対象もネーデルラントやケルンからヨーロッパ全体に拡大していく²²。Michael Aitzinger について Behringer が重視している点は、彼が Ireniker (宗派和解支持者)と考えられることである。Aitzinger はカトリック信徒と自認していたものの、当時勢いをもっていた反宗教改革派とは明らかに一線を画していたらしい。この点がストラスブールの Johann Carolus とのおぼろげな一致点として Behringer の中で浮かび上がっているようだ。

Behringer 自身が Meßrelation を重要視しているのは、他にも以下の点がある²³。

- (1) 最初1年おき、後に半年おきという長い時間間隔ながら「定期性 (Periodizität)」が認められる。
- (2) 過去一年間もしくは半年間とはいえ、ゆるやかな即時性 (Aktualität) が認められる。
- (3) 情報内容に関する信頼性 (Seriosität) が駆馱という情報ソースにより確保され则认为されていた。

しかし、新聞の本質を特徴づける4条件や現代のマスメディアの報道の特徴を考えると、次の二点も、Meßrelation のいわば先取の特性として指摘できるだろう。

- (4) 大道商売的な売り方をする「絵付き新聞 (Bildzeitung)」「一枚物 (Einblattdruck)」と違い、文体と叙述が中立的である (政治・宗教的なプロパガンダの色彩の強いパンフレットなどとも相違する)。
- (5) 内容上のテーマがセンセーショナルなことからではなく、軍事・政治が多く、若干の制限があったものの社会的な重要事項を広くカバーしていた (Universalität)。

こうしたタイプの公刊物は新規な存在であり、そのためか Meßrelation は、「1590年から1605

22 Behringer 2003, 311ff. 参照。

23 Behringer 2003, 313 および 317 参照。

年まで雨後の筍のごとくに増加した」²⁴。Behringer がまとめているところでは、判明しているだけで Aitzinger を含め10名の人物が Meßrelation を1580年代から1640年代までに編集刊行しており、同期間で出版点数が589点に上っている。

そして Behringer をして Meßrelation を定期刊行物の新聞の前身と考えさせるさらなる根拠は、Johann Carolus が自身の週刊新聞の名前（ただし、週刊で販売されたものにはタイトルも付されておらず、1年分を製本するために後から配布された表紙のタイトルではあるが）に Relation を使用したことと、やはり表紙にギリシア神話の伝令でもあり旅人の守護神でもあるメルクリウスの図案を使った点、さらには1年分の週刊新聞を製本してまとめる（いわば時事年鑑）という形態である²⁵。とりわけメルクリウスつまりメルクールを新聞の表紙で意匠として取り入れたり、新聞自体の名前に頻繁に使用する嚆矢は Meßrelation に見いだすべきという主張である²⁶。

では、これまでかなり詳細に紹介してきた帝国駅通に代表される通信システムの整備とヨーロッパ初の定期刊行新聞 Relation 紙はどう捉えられているのか。Johann Carolus 自身が独占発行許可を求めた請願書で自身がすでに手書きでニュースを販売していたこと、ニュースの入手に金銭を支払っていたことは江口（2014b）でも紹介した。この点について Behringer（2003, 356 および 358）は、各駅通局が作成し発信した通信である Ordinari-Zeitung 同様、Carolus の新聞でも情報の出所が駅通局の設置された都市名であったこと、しかも日付から駅通のリズム（すなわち一週間刻み）に合致していることを示した上で、ストラスブールが密度の濃い都市飛脚網を保持し、地図上はタクシス駅通の幹線上には位置せずとも、「1543年の最初の Ordinari-Zeitung からラインハウゼン（Rheinhausen）の駅通局にも都市飛脚を投入して」、ニュースを入手していたことを指摘している。

江口（2014b）でも紹介した新聞発行の経済的動機他に、Behringer（2003, 352f.）は彼の人文主義者としての政治宗教的な立場から「歴史の結末としての政治や法律を前面に」打ち出すこと、そのために最近の出来事を伝える媒体によって「理性の教育」を目指したのではないかというものである。これは畢竟、上にも述べた宗派对立融和論者としての Aitzinger の中立的な記述により理性に訴える姿勢をこそ受け継ぐものと言えるかもしれない。こうした分析により Behringer は新たな新聞成立への仮説を提示したと言える。

24 Behringer 2003, 313. 参照。

25 Behringer 2003, 318. 参照。

26 もちろん Behringer（2003, 321）も、Samuel Dilbaum が Rorschach で刊行した《Annus Christi 1597》を「興味深い中間段階」と位置づけている。Merkur を新聞の名前に関したケースもある。例：Münchener Merkur 紙。

4. ヴォルフエンビュッテルでの Aviso 紙成立について

Relation 紙と比べて、帝国駅通路線上に位置しないヴォルフエンビュッテルで1609年に Aviso 紙が第二の新聞として刊行された事実（この新聞は1609年1月15日付けが第1号と番号が振られている）は、これまでの駅通との関連からは説明できない。しかし、この点も Aviso 紙1614年および1615年版に明解にニュルンベルクの都市名が挙げられていることで解決済みと指摘されている（Behringer 2003, 363）。つまり、ニュルンベルクには帝国駅通局が1615年に設置されるものの、それ以前から活動していたと見られる Nürnberg Ordinari-Boten という都市飛脚²⁷ やヴォルフエンビュッテルの宮廷飛脚の存在に着目するのである。「すでに1570年代からこれらの飛脚はアウクスブルクを起点としてヴォルフエンビュッテルを経由しハンプルクまで週に一度のペースで活動して」（Behringer 同上）おり、1618年にはハンプルク最初の新聞発行のためのニュース配信にも貢献したと考えられている²⁸。この例が示しているのは、帝国駅通と各地の飛脚や領邦経営の駅通とは競合もしたが、次第に帝国駅通の重要度に配慮することで、むしろそれを利用、活用しようとする動きもあったという点である。帝国駅通に情報ソースを求めたと考える根拠として、例えば Behringer（2003, 364f.）は「1609年一年間の約2000本の記事の93%が六つの通信地である駅通局所在地のアントワープ、ケルン、プラハ、ウィーン、ベネツィア、ローマだった」ことを挙げている。つまり1609年分の紙面が現存する二つの新聞は相当程度「同じ日に特定の記事を、おそらく同じ駅通局から出た」ものを利用したのである。「両紙の相違を示すのは西ヨーロッパからの記事であり、Relation 紙のケルン発通信は木曜日の日付け、Aviso 紙は日曜日となっている。

図2は、タクシス駅通が1490年から1520年にかけて敷設した駅通路線、その後駅通改革を経て16世紀末から1600年頃増設されたと Behringer が記述している路線、そして特に Aviso 紙発行との関連で重要視されているニュルンベルク都市飛脚の路線、さらには、とくに17世紀後半に拡充されていく領邦駅通の先駆けとしてのバイエルン及びオーストリアの宮廷駅通などを現代の地図上に示したものである。駅通の路線は一度敷設された後で未来永劫維持される保証もない。参考にした Münzberg（1994）の帝国駅通の時代別路線図でも相当な変遷がうかがえる。帝国駅通の路線は、1620年代以降に非常な拡充期を迎える。また、プロテスタント諸侯の領邦

27 Polivka（1998, 177）によれば、15世紀のフス戦争前後からボヘミアとの情報流通拠点としてニュルンベルクが活発に活動していたことが判明しているものの、ハンプルクなどの北方に向けた飛脚活動はまれで、ここで問題にされている都市飛脚は16世紀後半以降のこと。

28 1634年には刊行が確認されているデンマークコペンハーゲンの新聞はほとんどハンプルクの三つの新聞から取られたと指摘されている（Behringer 2003, 425）。こうして一つの新たな情報中継点がさらに新たな中継点に伸びていくということで、Behringer は駅通・飛脚等の情報通信システムの概念が後の「鉄道、高速道路、航空網、電信、電話、ケーブル通信、そしてインターネットの母型」だと主張する（Behringer 2003, 685）。

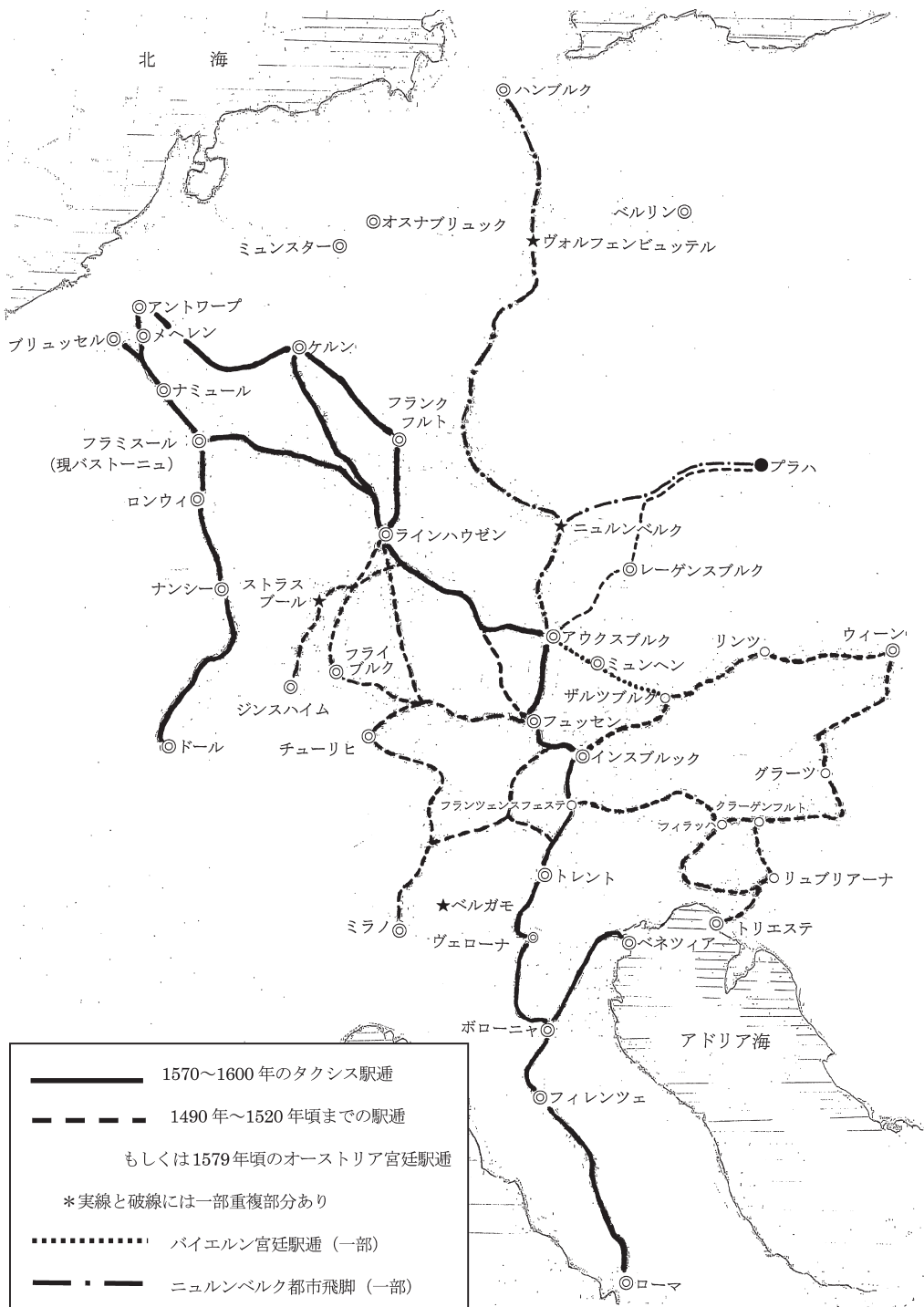


図2 1610年頃までのタクシス駅通や他の通信網の路線図 (現在の地図上に配置したもの)
Behringer (1990, 64.及び 56.)、Behringer (2003, 149ff.)、Münzberg (1994, T-5)
に基づき作成。

駅通も17世紀後半になり充実の度を強めていく。勿論中世以降活動していたさまざまな都市飛脚、いわゆる「肉屋郵便」(Metzgerpost) 等もここでは考慮できていない。

5. 十七世紀前半の新聞拡散のプロセス

Bogel/Blüm (1971) にしたがって、1609年時点での Relation 紙と Aviso 紙の刊行が確認されて以降、ドイツ語新聞がどの都市で刊行されたと考えられるかを辿ってみよう。この新聞一覧表(表1)は、Bogel/Blüm (1971) により現存する新聞が確認されたもののみを対象としている。つまり、資料が喪失したかもしれないケースは対象から外れている。また、発行地が不

【表1】17世紀初期のドイツ語新聞一覧表(刊行順) Bogel/Blüm (1971) を基に作成。

創刊順 および年号	刊行地	新聞のタイトルなど
1 1605	ストラスブール	Relation Aller Fürnemmen vnd gedenkwürdigen Historien
2 1609	ヴォルフエン ビュッテル	Aviso Relation oder Zeitung
	1610 不明	Newe Zeitung(en)
	1614 不明	Aviso oder Zeitung
3 1615	フランクフルト	当初タイトル無し 後に Frankfurter Postzeitung
4 1617	ベルリン	タイトル無し
5 1618	ハンプルク	Wöchentliche Zeitung auß mehrerley örther
6 1619	ヒルデスハイム	Die Erste (Ander ...) Zeitung/so sich in ... zugetragen hat
7 1619	ダンツィヒ ²⁹	Wöchentliche Zeitung
8 1619	シュトゥットガルト	Zeitungen
	不明	Relation dessen/Waß sich begeben
9 1620	フランクフルト	Diarium Hebdomadale, oder Wöchentliche aiso
10 1620	ケルン	Reporten
11	ギューストゥロー	Zeitungen/von vunterschiedlichen Orten
	不明	Continuat. Relat.
12 1622	ウィーン	Ordentliche Postzeitungen
13 1623	チューリヒ	Wochentliche/vugefelschte Newe Zeitung
14 1623	ケーニヒスベルク ³⁰	Avisen oder Wochentliche/vugefelschte Newe Zeitung
15 1625	エッティンゲン	Continuation der Augspurger (Nürnberger) Zeitung
16 1625	ロストック	Wochentliche Newe Hambürger Zeitung
17 1627	ミュンヘン	Ordinari Zeitung
18 1630	ヘルフォルト	Cinivn- und Avgirte Wöchentliche Zeitung
19 1632	ブレーメン	Zeitungen (Postzeitung)

29 現ポーランド領グダニスク。

30 現ロシア連邦カリニングラート。

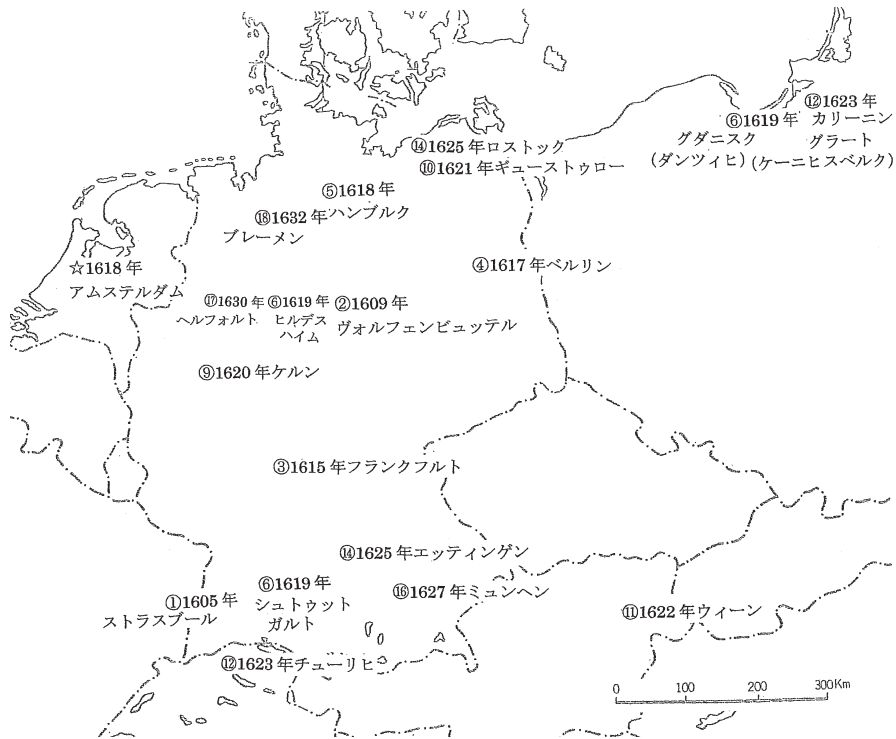


図3 1630年代までに創刊されたドイツ語新聞の刊行地の分布地図
丸数字は発行時期の順番と地図上の位置を表し、年号は創刊年代を示す³¹。

明の新聞で現存するものが、1609年から1632年までの期間だけで36紙ほど確認されている。表1では18紙のみ確認されたことになっているが、存在が言及されてはいるが現存する新聞自体が確認できないものや発行地不明の36紙の合計の方がはるかに多いということになる。時間軸に沿って発行地を地図上に辿っても、そこには何らかの地理的伝播の痕跡を見ることはできない。つまり1490年に帝国公認で設定され、以後拡大された帝国駅通制度と新聞発行の伝播との間に単純で直接的な因果関係を想定するのには無理があるということが分かる。

Relation紙およびAviso紙に続いて、1615年に創刊されたフランクフルトのPostzeitungは若干説明が必要であろう。名前の通りフランクフルトの駅通局で発行された新聞である。当時駅通局長だったJohann von den Birghdenは、駅通局長としてニュースを提供する業務も経験し、帝国駅通の局長として最初に新聞を刊行した。Birghdenは駅通局長としてときには文字通り命を張って駅通路線拡大に尽力した人物であるが、ラインハウゼンの駅通局長を務めながらMeßrelationの発行と流布を見聞し、さらにはストラスブールのRelation紙の刊行も承知していたと考えられる。表1にもあるとおり、これに倣ってPostzeitungの名を冠した新聞が複数刊

31 新聞伝播の年代順と地理的要因との関連はほとんど無い。

行されている。これらはフランクフルト駅通局長ビルグデン創刊のものが雛形となって、いくつかの都市で模倣されたものである。駅通局間の連絡記録が比較的保存されていることから、この新聞に関する諸データが残っている。その一部を挙げれば、貴族や他の駅通局への無料配布が行われていたこと、週に374部の部数があったこと、年間収入で344グルデン（一週あたり6グルデン余り）、印刷業者に156グルデン（一号あたり3グルデン）、記事作成者に約84グルデン、紙代として91グルデンかかったという数字である（Behringer 2003, 388ff.）。さらに Dallmeier の先行研究に基づいて、1628年の同紙が具体的に各駅通路線に配布されていたことが示されている³²。こうした事例から判明するのは、駅通局が新聞の作成に適していたこと（確実に信頼できるニュースの入手と迅速でやはり確実な新聞の販売・配布網をすでにもっていた³³）である。

イタリア、イギリスなどで当初禁止されていたように、神聖ローマ帝国の領域内でも新聞印刷をそもそも認めていない都市などが存在したが、Behringer (2003, 136) は、イギリスやフランスでなくドイツ語圏で最初に定期的な活字メディアが成立した理由を結局「英仏の郵便と比較して、帝国駅通が早い時期から一般の利用可能性」もったことと結論づけている。

6. 交通・通信基盤以外の新聞成立の諸要因

本稿では、主に Behringer (2003) に基づいて新聞成立の最大の前提と提唱された帝国駅通についての研究を紹介してきた。駅通を含む郵便史については他にも検討すべきものとして基本文献だけでも膨大なものがあり、さらに一次資料としての公文書類を各都市の資料館レベルでも調査できるもの、すべきものが天文学的な量で存在しているであろうことは疑いない。ここではそのごく一部に触れたに過ぎない。しかし、新たな公共コミュニケーション手段としての新聞を考えると、冒頭にも触れた視点を考慮、検討しないままでは的確な全体像を描くことは能わないであろう。例えば、マスメディア論というオーディエンスとしての受信者について、Behringer (2003, 435.および注 536) も Weber (1994) を紹介するかたちで「1605年から1700年の期間にドイツ語圏で約80の印刷所設立地でおよそ200の新聞を数えており、…〈中略〉…推計20万人から25万人の読者で当時の読書可能人口の20%から25%に達した」という記述を紹介してはいるものの、「残念ながら積算の根拠である人口数、識字率、同時に存在した新聞社数、新聞の貸し出し率などが明らかにされていない」と批判している。発行部数の限定された新聞の値段についても、Behringer (2003, 373f.) によると、Aviso 紙について支払い能力があったと考えられる侯爵や周辺の貴族、参事、官吏、薬剤師などが判明しており、年間購読料金も43

32 Behringer (2003, 390) 参照。

33 Behringer (2003, 428) 参照。

グルデンという数字が分かっている。Relation 紙の場合そうしたデータは確認されていない。さらに Behringer (2003, 434. および注 533) は、新聞販売と検閲との微妙な関係や郵便レガリア³⁴ に関係する各領邦駅通・都市飛脚との複雑な利害関係も含めて「テーマ全体が体系的な研究を必要」と指摘している。また、Aviso 紙に関わる記述でも問題点として浮かび上がった都市飛脚等の帝国駅通以外の通信システムの実態、駅通利用・運用の実態の更なる解明も必要であろう。

参考文献

- Behringer, W. (2003) Im Zeichen des Merkur. Reichspost und Kommunikationsrevolution in der Frühen Neuzeit. Vandenhoeck&Ruprecht, Göttingen.
- Behringer, W. (2010) Das Netzwerk der Netzwerke. Raumportionierung und Medienrevolution in der Frühen Neuzeit. In: Arndt, J./Körber, E.-B. (Hrsg.) *Das Mediensystem im Alten Reich der Frühen Neuzeit (1600-1750)* Vandenhoeck & Ruprecht, Göttingen, S. 39-57.
- Bogel/Blüm (1971) Die deutschen Zeitungen des 17. Jahrhunderts. 2 Bde. Band I - Text. Schönmeyer Universitätsverlag, Bremen.
- Dallmeyer, M. (1977) Quelle zur Geschichte des europäischen Postwesens 1501-1806. Teil 1, Quellen-Literatur-Einleitung, Kallmünz, Teil II, Urkunden-Regesten, Kallmünz 1977.
- 江口 豊(2013)「ドイツ語圏活字メディアの歴史について—新聞を中心に—」(研究ノート)『国際広報メディア・観光学ジャーナル』17, 3-12.
- (2014a)「ドイツ語圏における新聞の前身形態について」(研究ノート)『メディア・コミュニケーション研究』66, 59-71.
- (2014b)「活版印刷術の展開と新聞成立との関連について」(研究ノート)『メディア・コミュニケーション研究』67, 1-22.
- Jaeger, F. (2008) Enzyklopädie der Neuzeit. Bd. 8. Metzler, Stuttgart/Weimar.
- Lindemann, M. (1969) Deutsche Presse bis 1815. Colloquim Verlag, Berlin.
- Münzberg, W. (1994) Thurn und Taxis 1490-1867. Stationskatalog der Thurn und Taxis-Post. Regensburg.
- North, M. (2000) Kommunikation, Handel, Geld und Banken in der Frühen Neuzeit. R. Oldenburg Verlag, München.
- Pieper, R. (2001) Informationszentren im Vergleich. Die Stellung Venedigs und Antwerpens im 16. Jahrhundert. In: North, M. (hrsg.) Kommunikationsrevolutionen. Die neuen Medien des 16. und 19. Jahrhunderts. Böhlau, Köln/Weimar/Wien, 45-60.
- Polivka, M. (1998) Nürnberg als Nachrichtenzentrum in der ersten Hälfte des 15. Jahrhunderts. In: Heimann, H.-D./Hlavacek, I. (hrsg.) Kommunikationspraxis und Korrespondenzwesen im Mittelalter und in der Renaissance. Schöningh, Paderborn/München/Wien/Zürich, 159-177.
- Schneider, U. (2010) Grundlagen des Mediensystems: Drucker, Verleger, Buchhändler in ihren ökonomischen Beziehungen 1600-1750. In: Arndt, J./Körber, E.-B. (Hrsg.) *Das Mediensystem im Alten Reich der Frühen Neuzeit (1600-1750)* Vandenhoeck&Ruprecht, Göttingen, S. 27-37.
- 渋谷聡 (2001)「広域情報伝達システムの展開とトゥルン・ウント・タクシス家—16、17世紀における帝国駅通の拡充を中心に—」前川和也編著『コミュニケーションの社会史』47-72. ミネルヴァ書房。
- Stöber, R. (2014³) Deutsche Pressegeschichte. UVK, Konstanz.
- Weber, J. (1992) Unterthanige Supplication Johann Caroli/Buchdruckers. Der Beginn gedruckter politi-

34 山本 (2007) 参照。

- scher Wochenzeitungen im Jahre 1605. In: *Archiv für Geschichte des deutschen Buchwesens*, Bd. 38, S. 257-265.
- Weber, J. (1994) Die Novellen sind eine Eröffnung des Buchs der ganzen Welt. Die Entstehung der Zeitung im 17. Jahrhundert. In: Beyrer, K./Dallmeier, M. (hrsg.) *Als die Post noch Zeitung machte. Eine Pressegeschichte*. Gießen, 15-25.
- Welke, M. (2008): Johann Carolus und der Beginn der periodischen Tagespresse. Versuch, einen Irrweg zu korrigieren. In: Welke, M./Wilke, J. (Hrsg.) *400 Jahre Zeitung. Die Entwicklung der Tagespresse im internationalen Kontext*. Edition lumiér, Bremen, S. 9-116.
- 山本文彦 (2007) 「近世ドイツにおける郵便レガéria：帝国郵便とブランデンブルク郵便」『西洋史論集』10, 44-69.

(2014年11月28日受理、2014年12月4日最終原稿受理)

《SUMMARY》

〈research in progress〉

On the impacts of courier- and post system on the emergence of newspapers in the early 17th century

Yutaka EGUCHI

Though Gutenberg had invented printing already in the middle of the 15th century, we had to wait another 150 years, until the first newspaper was published in Strasbourg. The reason for this delay is discussed and clarified by Behringer (2003). He argues, that the official post system of the Holy Roman Empire, which started in 1490 but really stabilized and expanded after the 1590s, made a vital impact on the realization of newspapers. The simple reason, that a newspaper needs information for articles, at first weekly then later daily, seems to be plausible. According to some sources such as Dallmeyer (1977), Münzberg (1994) and other scholars it could be posited, that whole information systems at that time began to cooperate and offered an indispensable condition for the founding of the epoch-making news media. In this way the second newspaper the “Aviso” in Wolfenbüttel in North Germany was made possible because of cooperation of the Reichspost and the Nürnberger city courier-system.

Behringer (2003) points out another important fact, namely some similarities between the “Meßrelation” of Michael von Aitzing and the first weekly newspaper “Relation” of Johann Carolus in Strasbourg: the titles and the styles. But also Behringer assumes a mutual ideological background of both authors, a supposition which requires further subtle consideration.

While this article discusses promoting factors for the emergence of newspapers, it is still indispensable to consider hindering factors such as censorship, because we must be able to explain why England or France with their functioning post systems could publish a newspaper only later than the German speaking areas.